



## 映画雑感7

柴生田 晴四

(経済倶楽部理事長)

▼2018年上半期。まず新参者シリーズの「完結編「祈りの幕が下りる時」」。久しぶりに先輩の阿部寛とコンビを組むことになった溝端淳平の成長ぶりが嬉しい。悲劇の親子を演ずる松島菜々子と小日向文世が圧巻。

▼「今夜、ロマンス劇場で」は、映画が娯楽の王様だった時代へのオマージュ。銀幕から飛び出してくるヒロインを綾瀬はるか、てらいなく演じて荒唐無稽な物語に引き込んでく

れます。ヒロインに翻弄される誠実な若者を坂口健太郎が好演。

▼名脇役として知られる小林稔侍の初主演映画「星めぐりの町」。昔ながらの豆腐造りにこだわる寡黙な主人公のもとに、東日本震災で家族を失った遠縁の少年がやってきます。心を閉ざしていた少年は、やがて何も聞かずに淡々と豆腐造りに励む主人公に心を開き始めます。勝気な一人娘を壇蜜が颯爽と演じます。

▼「Bank 3」は俳優斉藤工の長編監督デビュー作品。13年前に失踪した父親が余命3か月と知らされる主人公。関係が修復されないまま父親は死に、形ばかりの葬儀の場に集まった見ず知らぬ人たちから、思いもよらない父親の真実が語られます。捉えどころのない父

親を演ずるリリー・フランキー、勝手に葬儀を仕切ってしまう佐藤二郎が出色。

▼青春映画も一つ上げるとすれば、「坂道のアポロン」。両親を事故で亡くして地方都市にやってきた優等生と地元不良少年がジャズを通じて心を通わせるのですが、やがて少年は姿を消してしまいます。青春の屈折を心地よいジャムセッシとともに描かれます。

▼晩年の老画家の日常をつづった「モリのいる場所」は、あらゆる世事に背を向けて自然の世界に遊ぶ主人公と、ひょうひょうと夫の日常を守る妻の姿を通して現代文明の虚妄を鋭くついで見せます。

▼「海を駆ける」は、深田晃司監督が7年をかけて完成させた日仏インドネシア合作映画。

戦争と津波の傷跡が残るインドネシアのアチエの海岸に倒れていた一人の青年。片言の日本語をしゃべることから、災害復興のNPOを営む日本人女性のところへ身を寄せます。やがて青年の持つ不思議な力が波紋を広げていきます。

▼ヒューマンな作品を数多く手掛けてきた河崎直美監督の「ビジョン」は、分かりやすさに慣れた観客にはいささか歯ごたえのある作品。永瀬正敏とフランスの名優ジュリエット・ピノシユが演ずる、山守の男と幻の薬草を探すフランス人女性の交流、盲目の老婆や森に倒れていた不思議な青年など、現在と過去が複雑に交錯。木々のそよぎや森の様々な音に身を委ね、謎を謎として感じ取るしかありません。